そのたびに内壁が驚いて、図太い男の肉棒を締めつけてしまう。締めつけるとどういう仕組みなのか、孔全体から悩ましい快感が湧きおこり、ぞくぞくと体内に甘い電気が流れ込む。

「いや…っいやぁ……っ、ぁあ…ッ♡も…たたかないで……っあぁ……ッ♡」

淫楽にのけぞるたび、後ろ手に縛られた手首にも力が入り、縄がいっそう食い込んでくる。こんなに固く縄がしまってしまっては、いよいよ自力でほどくことなどできない。恐怖と未知の快感とに、少年はしゃくりあげるほど泣きながら、全身をわななかせている他なかった。

「かわいそうに。ローターはもう止(と)めてあげようね」

長球の振動が止(や)み、シャツの間から差し入れられた手にペリ、とテープをはがされて、やっとローターの重みと刺激から解放された。
しかし男はまたゆっくりと、大きな抜き挿しを再開する。

「ぁあ…ッ♡あぁあ……っ♡んぅ…っ、ぁあ……っ♡」

ヌルヌルと中をこじ開(あ)けられたかと思えば、隆々(りゅうりゅう)とした幹(みき)の凹凸(おうとつ)を残しながら抜け出ていかれる――絶(た)え間(ま)ない行き来に、躰と頭が酔わされていく。

異物感にさざめいているのだとばかり思っていた内壁は、いつしか男の形を味わうかのように、より強い快感を吸い上げようとするかのようにひくついている。

「ぁあ…っ♡ぁぁあ……っ♡、」

ここがショッピングモールの中央広場だということも、板一枚隔てて大勢の人がいることもしばし忘れてしまうような、経験したこともない好(い)い心地になってくる。
こんな場所にこんなものを挿入(いれ)られて好(よ)がっているのだと思えば、どうしようもない恥ずかしさと中年男への悔しさがこみ上げてくるが、なぜかそんなことすらどうでもよくなってしまうような、ふわふわとした心地――。
しかしそれも長くは続かなかった。

「ひぁッ！？♡♡」

突如、両胸をシャツの上からこねられる。
中年男は、ベストの下に手を差し入れて、シャツごしに少年の両乳首をくにくにと弄(もてあそ)んできた。

「あぁ……っ♡♡だめ……っ、それ、いや……ぁ……っ♡、」

まだローターのぶるぶるとした振動の感覚が残っている両胸を、男は太い指頭

でくりくり、ぐりぐりと捏(こ)ねてくる。くずぐったさを煮詰めたような痺れが両乳首から駆けおり、熱のくすぶる腹底に落雷した。
同時に、びくびくとわなないていた腰がびくんッと大きくしなり、いっそう強く男を締め付けてしまう。

「あぁあああ……ッッ！♡♡♡」

男と繋がされた場所から悦楽が躰の芯をつらぬき、何も考えられなくなった瞬間、少年はふたたび幼茎から白蜜をほとばしらせていた。

「おぉ、乳首の調教完了だねぇ。じゃ、次はお尻の調教だね～」

どく、どく、とものすごい脈に乗って、孔の内側が男に絡みついている。
男は乳首を責める両手はそのままに、

「あぁッ！？♡♡…あぁあ……ッ！♡♡」

あろうことか律動のスピードを速くして、今までにない強さで打ち込んできた。

「ひぃ…！♡♡♡あぁ…！…っ♡♡♡だめ……やめて…ぇ…あ″ぁッ♡、」

ぐちゅッぬちゅッぬちゅッ……

おびただしい水音が箱内に響く。

男と少年の熱に、狭い暗闇はむわむわとした霧に包まれているようだ。

「あぁッ…！♡♡止(と)まって……とまって…ぇ…っあぁッ！♡♡♡あぁあ…ッッ♡♡」

男は少年の乳首を中指でいじくりながら、残りの指で少年の脇下を掴み、固定している。

少年は暑いからといって、上半身に下着を着てこなかったことを悔やんだ。

シャツの繊維が敏感になった胸に与えてくる、ざらついた質感。男の指の熱も相まって、そこが余計、卑猥な疼きに犯されていく。

「あ…♡ぁあ…！♡っあぁあ……ッ♡♡♡ひぃ…っ♡あぁッ♡♡あ♡」

ぬちゅッぬちゅッぐちゅッぬちッ……

快感のために背筋だけが、男の巨体から逃げるように仰(の)け反(ぞ)っていく。しかし胸部を固定され尻孔は絶えず図太い幹(みき)に接合させられて、どんなに背を弓なりにしたところで、実際に男からは離れられない。

前後に動く男の腰は、ときおり微妙な上下運動すら含み、波打つような角度で

少年の奥を穿(ほじ)ってくる。

「あぁ…ッ♡♡ん♡ぅ…ッ♡♡いや…あぁ……ッ♡♡だめ…ッ…あッ♡あぁあ……ッ♡♡♡」

孔内は泉のように濡れそぼって、いまだ恐ろしいほどの硬度をもった男の幹に、泳ぐような自由さで掻き混ぜられる。ぐずぐずになったそこを図太い男に行き来されるたび、言いようのない快感が体内に刻まれる――。

ぐちゅッぬちっぬちッ……！

「あぁあああ……ッ！！！！ッ♡♡♡♡」

先程の絶頂から一分と経たぬうち、敏感になりきった下半身はまた、びくんッと大きくのたうった。ぬるついた孔が動き続ける男に絡みつく。背筋と脳天とにばちばちと快楽の火花を散らせて、少年は達(たっ)していた。

「何……？またイったの？」

「ぅ……♡ぁ……！？♡♡イった！もうイったのぉ……っ！ぁあッ♡♡♡」

男は律動を続けている。

胸を弄(いじ)るのをやめたかわりに、男は少年の腰骨をふたたびしっかりと掴み直し、

「あ″ぁッッ！♡♡♡あ″…ッ♡♡いやあ…ッ、！！」

どちゅッどちゅッ、と奥を突きあげるような烈(はげ)しい抜き挿しに転(てん)じた。

「や″め…ッ！、やめてよ……ッあ″ぁッッ！♡♡♡」

まるで物でも扱うような荒々しさだが、蕩(とろ)けた肉壺にはこのくらいの刺激が丁度良いような、むしろこの刺激を待ちわびていたかのような、奇妙な充足感に支配されていく。

「あぁあッ♡♡♡いやあッもういやあ…ッ、あぁ…ッ！♡♡♡♡」

泣き叫びつつも、その声には自分のものとは思えない、媚びるような響きがある。

どちゅどちゅどちゅ……ッ♡

高速で穿(うが)たれながら、押せば鳴る玩具のように少年は喘がされ続けた。

「『いや』？じゃあ、反省してる？おじさんに悪戯(いたずら)したこと、悪かったなって思ってる？」